The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	梁啓超と「アメリカ」 : 一九〇四年の「新大陸遊記」をめぐって
Author(s)	川尻, 文彦
Citation	中国研究集刊. 2005, 37, p. 54-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61185
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　致号（総三十七号）平成十七年六月　五四―七四頁

梁啓超と「アメリカ」
――一九〇四年の「新大陸遊記」をめぐって

川尻文彦

一　問題意識
二　実際の行程と「新大陸遊記」の成立
三　アメリカの民主政治
四　アメリカの人種問題
五　華僑問題と「族民」
六　結論　「新大陸遊記」の位置づけ

一　問題意識

光緒二十九年（一九〇三年）、三十一歳の梁啓超（一八七三～一九二九）はカナダを経由して、アメリカに渡った。この渡航に関して残された記録が本稿で扱う「新大陸遊記」である(注1)。

この渡米の動機、目的については様々な推測がなされているが、定説はない。当時、改革戦略の相違からその師康有為との不仲も噂されてはいたが、梁啓超が康有為の意思を無視して自らの行動、とりわけ海外渡航を決断することは考えづらい。おそらく多くの研究者が推測するように、康有為の命によるものであろう。在外華僑らの保皇会(中国維新会 Chinese Empire Reform Association)の基盤固め・発展のために梁啓超を派遣したというのである(注2)。それに加え、幼くして「西学」に馴染んできた梁啓超が欧米社会を実際にみておきたいという彼自身の希望もあったと思われる。彼自身は「この旅行の目的は、一つには我が黄族の海外における情状を調査すること。二つには新大陸の政俗を実察すること」（「海外殖民調査報告書」（一）(注3)）と言っている。この旅行以前、

「白人植民地」への渡航経験はハワイ（光緒二十六年二～七月）とオーストラリア（光緒二十七年二～四月）がある。ヨーロッパへはまだ行っていない。四年前のハワイ行きに関してはもともと渡米を企てていたものの、義和団事変の勃発、清朝の反対(注4)、ハワイにおけるペストの流行(注5)等にあって途中でひきかえしたという経緯がある。「新大陸遊記節録」（後述するように『新民叢報』への掲載時の正式名称。煩雑なので以下は「新大陸遊記」で統一する）に附録として収録されている「夏威夷（ハワイ）遊記」（原題「汗漫録」）がその記録である。

今回の渡航は一九〇三年一月二十三日横浜を発ち、二月六日カナダのバンクーバーに入港、その後鉄路アメリカ合衆国入り、新大陸を周遊、九月二十三日横浜着にいたる九ヶ月ほど（この年は五月に閏月がある）のものである。梁のこの渡航に関してはその行程、視察内容もさることながら、梁啓超の思想が「保守化」、「国家主義化」した契機としてこれまで研究者の注目を集めてきており、梁思想の大転換の文脈で必ずといってよいほど「新大陸遊記」は言及されてきた。一八九八年の日本亡命後、彼の「思想は一変」し、従来の「保皇」の立場を離れ、「革命排満」「破壊主義」を唱え、孫文との合作さえ模索したとされる（康有為の怒りをさそった）など日本において梁の思想は「急進」化の一途をたどった。その頂点が渡航直前の一九〇二年であったとされる。同年春、康有為は、「与同学諸子梁啓超等論印度亡国由於各省自立書」や「答南北美洲諸華商論中国只可行立憲不可行革命書」(注6)で梁啓超の議論を「亡国滅種之言」としてきびしく批判している。康有為と梁啓超の「不和」が指摘される所以である。

しかし、渡米をはさんで梁の思想がまたもや「一変」したというのである(注7)。その根拠のひとつにしばしばいわれるのは、渡航をはさんで当時『新民叢報』に連載していた「新民説」の論調の変化にある。帰国後、にわかに「公徳」ではなく「私徳」を、「固有の旧道徳」を高くかかげて主張し、全人民の改鋳をはかる「新民」の理想が揺らぎはじめたというのである(注8)。もちろん坂出祥伸氏のように「梁啓超自身も、後年、この時の思想的後退を認めていることは事実であるが、これはあくまでも「後退」とみるべきであって、かれ自身の立場に基本的な転換があったと見るべきではない」とする立場も存在する(注9)。しかしながら坂出氏も含め、渡米をはさんで何らかの思想的転換が存在したことについておそらく異論はないだろう。

またさらに梁啓超自身、自らの心境の変化をつづった

書簡がいくつか存在する。たとえば、渡航直後のバンクーバーから徐勤にあて「中国は革命を捨いてほかに別の方法はないと弟は深く信じている(注10)」としていたのが、その五ヵ月後の蔣智由にあてた書簡では「中国は頑固派によって亡ぶのではなく、新党によって亡ぶ。悲しいかな、悲しいかな。……弟、ここ数ヵ月来、新党の紛乱腐敗の状を見るにつけ、ますます革義(注11)〔革命の義〕をくりかえし唱えることをしなくなった(注12)」と日本での革命党の「紛乱腐敗」を憂える。さらに滞米後半のサンフランシスコに着く直前に康有為にあてた書簡には「革義の実行しがたいことは先生のおっしゃる通りです(注13)」という。つまり破壊主義と革命的排満主義を放棄したとみる。通説ではこの書簡をもってつまり六月二十七日の時点で、梁啓超思想の「転換」とみなすようである(注14)。これらはいずれも『梁啓超年譜長編』に収録されている資料であり、いわば『年譜長編』の描く梁啓超思想変化のストーリーでもある(注15)。

ただ私としてはこれらの材料をもってして梁思想のきっぱりとした「転向」を見出すことにためらいを感じる。これらは日本を遠く離れた滞米中の梁のゆったりとした思想的な「揺れ」を示すものではあっても、これらの断片的な文句それだけでそれ以上の意味を見出すのは難しいのではないか、というのがいまの私の立場である。

さて梁思想の変化の原因についての見解は、アメリカ視察の結果を重視するもの、新たに導入したブルンチェリなどの思想的影響（「政治学大家伯倫知理之学説」一九〇三年一〇月四日、等）を重視するもの様々である。古典的な梁啓超研究である張朋園『梁啓超與清季革命』（一九六四年）は、一、康有為への経済的依存度が高まるなどの康有為との師弟関係、二、破壊の後の建設が容易でないことへの恐れ、三、革命党に対する感情の悪化、四、James Bryce（ジェームス・ブライス、占士布利斯）のThe American Commonwealth（『美国政治論』）の影響を受けるなど政治思想の変化（同書は「新大陸遊記」のなかで言及される）、五、黄遵憲の影響、の五つの要因を挙げている(注16)。さらに張氏は近著（二〇〇二年）の中で六として加藤弘之および加藤が日本語訳したブルンチュリ（Johann K. Bluntschli）『国権政治論』の影響を加えるべきとしている(注17)。おそらく一つの要因には決められず、いくつかの複合的な要因が存在するとしかいいようがないのではないかと思われる。またさらに思想変化の過程についても多方面にかかわる分析がこんご必要に思われ、いまだ定論がないと言ってもよい(注18)。

そこで本稿ではまず梁啓超の思想転換の内実を解明す

るために「新大陸遊記」そのものに即した分析から始めたいと考える。

二　実際の行程と「新大陸遊記」の成立

前述のように、梁啓超は一月二十三日に横浜を発ち、同二十六日に太平洋の船上で三十一歳の誕生日を迎える。梁啓超自身も「年々この日は必ずその場所を変えている。ここ一〇年来、一日として重複がない」（一頁）と述べるように、九三年（癸巳）は家郷、九四年（甲午）は黄海上、九五年（乙未）は京師、九六年（丙申）は上海、九七年（丁酉）は武昌、九八年（戊戌）は洞庭湖船上、九九年（己亥）は東京、一九〇〇年（庚子）はハワイ、〇一年（辛丑）はシドニー、〇二年（壬寅）は日本の東海道線の車中、そしてこの〇三年（癸卯）は太平洋上、と所を変えている。まさに一八九八年の戊戌変法を挟んで梁啓超の激動の人生を象徴していると言えよう。

二月六日、カナダのバンクーバーに上陸、バンクーバー滞在は四月三日までで、二ヵ月間弱。その後大陸横断鉄道（Canadian Pacific Railway Co.）に乗り、オタワ経由で、一〇日にモントリオール着。それぞれオタワ二泊、モントリオールに五泊し、四月十六日にニューヨーク入りした。

ニューヨークにはおよそ二ヶ月滞在するが、その間、ニューヨークを拠点に東海岸の各都市をめぐった。そのためニューヨークの実質的な滞在期間は一ヵ月ほどであった。ニューヘブンのイエール大学を参観して、四月末日にケンブリッジのハーバード、二泊の後、五月二日にボストンへ。ボストンでの九日間、一日の半分は国人〔中国人〕との演説・談論に(注19)、残りの半分は史跡を訪れたという。ボストンを拠点にして各地をめぐり、プリマスや四日にはボストン茶会事件のあったボストン港、一七七七年にイギリス軍との壮絶な戦いのあったビーコンヒル。そのほかボストンコモン（公園）、図書館などに行った。十一日に船にてニューヨークに戻る。さらに十四日にはワシントンに行き、国会（Capitol）、図書館、ホワイトハウスを参観する。十七日にはローズベルト大統領と半時間にわたって会談。十八日にニューヨークに戻る。二十一日にはフィラデルフィアに行く。独立記念館（Inde-pendence Hall）や自由の鐘（Liberty Bell）等市内の史跡を観光するが、もっとも印象ぶかかったのが二十三日に行った海軍造船所である。そこでは増強されつつあるアメリカの海軍とそれを背景にしたモンロー主義について思いをはせる。二十五日にニューヨークに戻る。

翌閏五月四日には二ヵ月近く滞在したニューヨークをついに離れることになる。まずフィラデルフィアに行き二泊、六日にボルチモアを経由、七日には十七時間列車にゆられピッツバーグに到着する。ピッツバーグには立志伝中の人物カーネギーの大製鉄所が存在する。十四日にピッツバーグを発ち、シンシナティを経由して、十六日に南部のニューオーリンズに到着。南部の黒人、政治の状況を目にすることになる。二十五日にセントルイスへ、一日に発ち、六月二日シカゴ着。アメリカ第二の都会に発展したシカゴでは「文明西漸之潮流」をまのあたりにして感動する。その間、シカゴ近郊にも出向く。十三日にシカゴを発ち、翌十四日にカンザスシティに、十五日にモンタナ州に入り、大北鉄路の列車に乗る。その後、モンタナ州のビィリングス、リビングストーン、ヘレナ等数市で演説を行う。その後、二十九日にはポカテロ着、アイダホ州に入る。そしてついに七月八日にはワシントン州第一の都会、西海岸のシアトルに到着。これでようやく大陸を横断したことになる。

シアトルに三泊し、西海岸を南下、十二日にはオレゴン州のポートランド着。八月三日にポートランドを発ち、五日にサンフランシスコ（旧金山）着。その後、一〇日にロサンゼルス、二〇日サンフランシスコに戻り、九月五日に「高麗」号に乗り、帰途につく、ポートランド（八日）、バンクーバー（一〇日）を経て、二十三日横浜着という行程である。以上、いくらかはっきりしないところもあるが、「新大陸遊記」の記述によりながら梁の行程をたどってみた。

大まかに全体をほぼ均等――おおよそ二ヶ月毎――に四つの時期に分けることができるであろう。最初の上陸地カナダ・バンクーバーに滞在した第一期。ニューヨークを拠点にボストン、フィラデルフィアなど東海岸をまわった第二期。ニューオーリンズなど南部、中部をまわった第三期。その後、サンフランシスコ、ロサンゼルスなど西海岸をまわった第四期、の四つである。

ではこの「新大陸遊記」はどのように書かれたのであろうか。まず「新大陸遊記」の成り立ちを見ておきたい。

「新大陸遊記」は日本への帰国後、一九〇四年二月に『新民叢報臨時増刊』（「記華工禁約」も付す）として公表、発行された。一読して旅行中に書き溜めておいたものを帰国後、加筆し、まとめて出版したものと見て取れる。というのも、旅行中では入手・参照不可能と思われる資料、統計の類も「新大陸遊記」には散見されるからである(注20)。梁啓超自身も「凡例」のなかで「新大陸遊記」の成立について証言している。それによれば遊歴中、書

き溜めておいた原稿はあったものの、散漫でそのままでは読むにたえないものであったので、日本に帰国後、二〇日間ほどを使いあらためて整理しなおしたという(注21)。

しかしながら当初は旅行をしながらの連載を考えていたのではと考えられる。というのは、渡航直後の『新民叢報』第二十八号（一九〇三年三月二十七日発行）に「海外殖民調査報告書」と題して掲載されているからである。大黒柱であった梁啓超不在中の『新民叢報』の発行状況についても不明な点が多いが、実際の日付よりも遅れて発行されるのが常であったようである。「海外殖民調査報告書」は、新大陸の最初の上陸地であり二月弱滞在したバンクーバーでの記録である。「海外殖民調査報告書」と「新大陸遊記」の当該部分を見比べてみることで「新大陸遊記」の成立過程の一端を垣間見ることができる。結論から言えば、旅行記全体の体裁をととのえるための記述を除けば、「海外殖民調査報告書」がそのまま「新大陸遊記」に組み込まれている。その内容は、バンクーバーの地勢、華人の生活・経済状況、中国維新会についてなどである。文字通り「調査報告書」といってもいい内容である。

ではどうして旅行しながらの紀行文が書かれなくなってしまったのか。その要因のひとつは梁啓超自身の記述から推測できる。ニューヨークに着いてすぐ梁は「実際にニューヨークにいたのはひと月に過ぎない。その間、邦人に接見したり、新聞社を訪問したり演説したり宴会に出たり、一日のうち八、九割を費やしており、遊覧調査の事にあてる時間的な余裕がなく、観察するところい加減なことくに甚だしく、夜間、通訳者や辞典の助けを借りて新聞を読んだり市民を訪問したりするものの、この世界第一の都会を評論しようとするのはいわゆる隔靴掻痒である。」（四月十六日）（十五頁）と言っている。要するに連日の接待攻勢、講演の依頼等で当初の目的である「遊覧調査之事」にじっくり取り組む時間的な余裕がなくなってしまったのであろう。それで現地報告のスタイルは放棄されることになる。

帰国後いくらか間をおいて旅行記のスタイルを保ちながら、現地報告・現地での見聞を交え、さらには特に「新大陸遊記」の後半部分に顕著であるが、梁自身の政論、アメリカ政治論、華人論等が混在する独特の文章になったと言える(注22)。その意味で清末に数多く書かれた海外渡航記の類とおもむきを異にしている(注23)。本稿で「新大陸遊記」を独立した思想文献として分析する所以である。事実、「新大陸遊記」は全体として論理、主張内容に整合性があり、一つの「作品」として読むことを想定さ

れているように見える。

さらに梁啓超自身、渡航時にはすでに中国の思想界のスターとして確固たる地位を築いていた。その彼がどのようなアメリカ像を読者に提示するのか周囲の期待もあったであろう(注24)。

三　アメリカの民主政治

梁啓超の欧米諸国への関心は、もっぱら民主政の先進国としてのものであったといってもよい。その一つの例が、「君政と民政が移り変っていく道理を論じる」〔論君政民政治相嬗一八八七年。『時務報』第四十一冊〕である。『春秋』の「張三世」の原理に基づいた康有為の三世進化論の影響を受け、天下は多君の世（酋長の世→封建及世卿〔世襲貴族〕の世）、一君の世（君主の世→君民共主の世）、民政の世（有総統の〔総統のいる〕世→無総統の〔総統のいない〕世）、以上の「三世六別」の順に進化していくと考える。多君は拠乱世、一君は昇平世、民政は太平世にそれぞれ対応する(注25)。

中国、ロシア、イギリス、日本等は「一君の世」の位置付けであるが、フランスとアメリカは「民政の世」としていわば世界の最先端の地位を与えられている。しかしフランスに関してはフランス革命そのものには高い評価が与えられるものの、革命後の「暴民」化についてシビアな見方をしていて(注26)、世界でただひとつアメリカに対してのみ高い評価が与えられていると言ってもよい。

一八九九年、日本からホノルルに向かう途中（このとき最終的な目的地はアメリカだった）、「二十世紀太平洋歌」のなかで「かの世界共和政体の祖国に適ゆかんとするを誓う(注27)」とうたったようにアメリカの共和政治に対して過大ともいえる期待をいだいていたことが知られる。

当時の梁啓超には欧米への渡航経験はなく（ヨーロッパ行きはさらに遅れて一九一八年。「欧遊心影録節録」一九二〇年刊）、ヨーロッパとアメリカの差異についてすら自覚的に考えるようになったのも実は渡米後がはじめてであったと思われる(注28)。彼のアメリカ認識は観念的の域を出ていないのはやむを得まい。

渡米以前の梁啓超は日本での日本語書籍を主にした読書ノートともいうべき『自由書』の「自由祖国之祖」（一八九九年）でアメリカに言及している(注29)。実はこの短い文章は「新大陸遊記」の「アメリカの歴史ともっとも関係が深く、共和政治の発光点」（四八頁）であるボストン滞在時（五月初旬）の一段にほぼ全文そのまま引用されている。

「自由祖国之祖」は、プリマスに始まるいわゆるアメリカの建国神話を扱ったものである(注30)。プリマスはボストン近郊の小さな漁村。梁啓超も車で五時間ほどかけ実際に訪れたという。そこにはイギリスの圧政に苦しみ「独立の精神」をもった「百一人の先人たちが一六二〇年十二月二十二日、冽風陰雪のなか舟を捨て陸に登り、繭足（足にたこをつくり）にて大西洋岸の石上〔プリマス・ロック〕に立った時、その胸中は限りなく塊壘抑塞、その身体は限りなく自由自在、その襟懐は限りなく光明俊偉であった」（四八～四九頁）のである。

先人たちは北米大陸の厳しい気候の中、「私有財産を廃止しプラトンの共産主義を実行に移した。ほどなく故国の人々はそれを聞き、非常に羨ましがってやってくる者が日に日に増えたが、共産主義の制度では長続きさせることができないと分かって、それぞれ土地を一畝ずつに分かって私有にし、村を建設し、管理の法を皆で議論した。まず議会を建て、ブラットフォード（勃黎福）をプレジデントに選び、小事はブラットフォードが処理し、大事は公議公断によるとした。すべての青年はみな会議権をもっていた」（四九～五〇頁）。ここに代議制度、アメリカ共和政が始まったとする。

もちろん「アメリカ人の合洲・自立の端、ほとんど何一つボストンに発源しないものはない」（五〇頁）と梁啓超が指摘するように、ボストンにおけるイギリスとの独立戦争等の紆余曲折の過程を経て、このような各地での共和政がより集まって、徐々にアメリカ合洲国が成立していったのである。

しかしながら、この滞米期間、梁啓超はアメリカの民主政に対して徐々に単純に失望とはいいきれない、複雑な感情を深めることになる。それはなぜなのか？

ボストンからニューヨークに戻り、五月十四日「首都」ワシントンを訪れる。各所を見学した後、十六日に国務長官ジョン・ヘイを自宅に訪ね、二時間ほど中国の政局について語る。五月十七日には、ワシントンにセオドア・ローズベルト大統領を訪ねる。「ドイツ皇帝ウィルヘルム二世を彷彿とさせる」大統領との「会談は約三〇分、深い話はなかった」ようであるが、その後、アメリカ政治の問題点について折に触れて言及するようになる。

そのさい梁啓超はイギリス人の占士布利斯の著した『美国政治論』を随所に引用する（六二、六八、一四二頁等）。占士布利斯とは Bryce,James ブライス，ジェームス（一八三八～一九二二）のことで、『美国政治論』の原題は *The American Commonwealth, 1888* である。この本は、トックヴィルの『アメリカにおける民主主義』と並び称

されるアメリカ政治論の古典として今日にいたるも名高い。同書には日本語の訳本が存在し、『平民政治』ゼームス・ブライス原著、人見一太郎訳述(注31)、民友社発行、上下、一八九〇年、として出版されている(注32)。上下二冊、三千頁近い大部の著作である。人見は民友社の一員、徳富蘇峰とも関係が深い人物(注33)。「新大陸遊記」への引用と照らし合わせてみると梁啓超がこの『平民政治』を参照したことは確実である。『平民政治』は、第一編国民的政府、第二編州政府、第三編党派制、第四編輿論、第五編（標題なし）、第六編社会の制度、からなり、アメリカの政治制度全般について論じる。百科辞典的な知識を与えてくれる内容豊富な著作である(注34)。梁啓超も渡米に当たって、本書からアメリカ政治に関する様々な知識を吸収したと思われる。

梁啓超はまず大統領制に関して疑義を呈する。「アメリカの大統領に庸材が多く、すぐれた人がその位にいることはきわめてまれである。これが実は我われ異邦人にはもっとも不可解な問題である」（六二頁）としている。「建国以来の二十四名の大統領のなかで、ワシントン、ジェファソン、リンカン、グラント、マッケンジーを除いては、平々凡々な人々である」（六二頁）という。この部分は『平民政治』第八章の「何故に英傑の士大統領に撰まれざるか」を下敷きにしている(注35)。

またアメリカ政治の問題点として、さらにアメリカの第一流の人物が政界に入ろうとはしない、アメリカの国勢や憲法の制約がある、英傑の士には敵が多く選挙の際に不利である、等の理由を挙げている。この部分も『平民政治』第五八章「何故に第一流の人物は政治界に入らざるや」に相当する(注36)。

さらに梁がいうには、「大統領はほとんど党派中の一傀儡であることを免れていない」（翌一九〇四年の大統領選でこのことをあらためて確認する(注37)）、「アメリカ大統領選挙の弊害はどうしてこれだけにとどまろうか。そのほかの種種の暗闇の情状は枚挙にいとまがない。」（六五頁）

『平民政治』から梁啓超が引用する通り、これらよりさらに酷いのはニューヨーク、フィラデルフィアに見られる市政の混乱である（一四二～一四三頁）。それは多額の選挙費用、各党派の運動費が必要とされるため、選挙後の論功行賞によって官吏の任用が公平さを欠き、さらに官吏の「職権の濫用、公益の蹂躙」（一四三頁）が目に余るという状態に陥っていると指摘する。これがまさしくニューヨーク、フィラデルフィアが暗闇政治となっている淵藪であるという。

党派争いの激化――梁啓超も「アメリカの政治史は実は党派史の合本である」（一四五頁）という――、黒幕的政治屋・ボス政治家の台頭による政党政治の機能不全についてはブライスが『平民政治』でしばしば強調する点である(注38)。おそらく『平民政治』執筆当時の十九世紀後半、南北戦争（一八六一～六五）後のアメリカ政治のマイナス面を反映したもののように思われる(注39)。しかしながらブライスの著作はアメリカ民主主義の問題点を指摘しながらも、基本的にはヨーロッパ人からみた新興の「アメリカ民主主義の創造力に対する信頼の表明であった(注40)」と見なせる。

しかしこれに反し、この旅行後、梁は「共和政体」は中国には適さないとの結論を持つに到るのである。すなわち「私はアメリカをめぐってから、共和政体に比べ実際には君主立憲のほうが流弊も少なく、運用もすぐれていると深く嘆いた」（六五頁）という。

その一方で、梁啓超は「アメリカの大統領は必ずしも第一流の人物ではないだけではなく、第一流の人物を求めていない」（六三頁）という。つまり大統領が「第一流の人物」でなくとも問題はないわけである。

さらに「アメリカはモンテスキューの三権鼎立の義を実行しており、その権限ははっきりしている。アメリカはどうしてそれができるのであろうか。イギリスの憲法に基づいて自然と発達し、アメリカではすべて人力が加わっている」（六二頁）と、共和政、「三権鼎立の義」を実行するに当たってのアメリカの「人力」の確かさに評価を与えているのである。この「人力」の差が、米中の差となって梁啓超には映って見えたのである。

以下、「人種」「華僑」認識と絡めながら、『平民政治』から離れた梁啓超独自のアメリカ政治認識が展開される。

四　アメリカの人種問題

この渡米で梁啓超ははじめてさまざまな人種が交錯する場としてのアメリカを実見し、その意味を考える機会をもった。とりわけニューヨーク、南部、中国人の数多く住む西海岸での体験は大きかった。

もともと種族問題は満州族王朝の清に生きる梁にとっても大きな問題であり、その一端は「論変法必自平満漢之界始」（『変法通議』）（一八九八年、『清議報』第一、二冊）にうかがえる。「変法通議」に収められた同論文は清末における漢族、満州族の融和を説く先駆的かつ代表的な見解を示している(注41)。梁は漢族、満州族ともに「黄族」であるからして、社会ダーウィニズムの立場から中

国自体が「瓜分」の危機にある今、両族の一致結束、危機の克服を説く(注42)。満漢の「融和」を説く同論文の趣旨とはうらはらに、同論文は満州族の漢族とは異なった生活スタイル、習慣に――清末の思想家としては比較的早く――はっきりと言及している点が注目される(注43)。漢族との違いを強調するこの論点は後に梁の論敵となった革命派に引き継がれ、梁啓超の帰国後、革命派との間に政治革命、種族革命をめぐる論争がくりひろげられた。「融和」を求める梁の考えはおおむね不変である。

その梁啓超がニューヨークでいうには「私がアメリカに来て、アメリカ人のために憂え、恐れることはなに一つとしてない。しかしながら、一つだけある。それはヨーロッパおよびその他各地の下等民族が日々アメリカに輸入されていて、その国民になっていること)である」(二八頁)と。ここ二十五年間にアメリカに流入してきた外国人の数は一一八〇万人余り、アメリカの全人口の七分の一を占める。国別ではイタリアおよびオーストリア・ハンガリー人がもっとも多く、昨年十七万余、今年二〇万余。次にロシア人が昨年一〇万余、今年十三万。この三国の合計が全体の三分の二を占める。人種別では、ラテン民族が八分の三余、スラブ民族が八分の二余、その他東方民族と分類しがたい民族が八分の二余、チュートン民族がわずか八分の一。ドイツ系、北欧系の減少と南欧系の増加がはっきりと傾向として現れているという。おそらく数十年以降にはアメリカはチュートン人の国土ではなく、「下等民族」であるラテン人およびその他の人種の国になるであろうと梁は予測する。

ここでてくるチュートン人とはあまり聞きなれないことばであるが、「新民説・第四節」にすでに詳しい説明がある(注44)。梁によれば世界は、黒色、紅色、棕色(ブラウン)、黄色、白色の五つの民族からなる。白色民族はさらに、ラテン民族、スラブ民族、チュートン民族。チュートン民族はドイツ等のゲルマン民族、アメリカ・イギリス両国等のアングロサクソン民族の二種からなるという。これらの民族は「天演物競之公例」により互いに競争しあう関係にあるが、このなかでも白人、チュートン族が「主中之主」「強中之強」であるのは、「進取」の精神があったり、「政治能力」「権利思想」「独立自助」の精神が優れていたりするかならなのである。これらは「新民説」で節を分かちながら説かれている諸項目であることに注目すべきである。「政治能力」は第二〇節、「権利思想」は第八節。まさしく「新民説」は中国人をふくめた「黄族」が「チュートン族」のようになるための指南書なのである。チュートン族は前述の諸特質があった

からこそ代議制度を整え、人民に参政権を与え、個人と団体の権限、中央政府と地方自治の権限を定め、民族全体が時変に適応しながら発達してきたと梁は考えた(注45)。これは　アメリカの発展の歴史とも重なるものである。

ではチュートン族が少数派へと転落しつつあるアメリカはどうなってしまうのであろうか。梁は、アメリカは平等、博愛等の理想をもって自他の誇りとしているとする。しかし梁はこのような「アメリカの立国のもとはどこにあるかといえば、チュートン民族の特質にある」と考えるのである。政治上、社会上、様々な権利をチュートン民族の手から離してしまったら、アメリカは今日のアメリカではなくなる。いわばチュートン民族の国家としてのアメリカ像が梁のなかには確固としてある。アメリカの「多民族性」については梁からみればネガティブな評価しか与えられないのである。

ニューヨークに二〇万余りいるとされるユダヤ人に対しては守銭奴、不潔と辛辣である(三六頁)。また梁は「暗闇のニューヨーク」についても言及し、それには中華街が含まれる。全米の総財産の一〇分の七が二〇万人の富豪の手にあり、残りの一〇分の三は七九八〇万人の貧民に属すると指摘する。「繁盛」するニューヨークとは裏腹に富の寡占が進み、「貧民窟」の現状は日々厳しさを増している。「平等の理想」からは非常に遠くかけはなれて、「教育の普及の一語は空言のようであり、天下の大勢はついに滔々と専制に戻っていっている」(四一頁)という。ここで「教育」と「専制」があわせて語られている、つまり「教育」の欠如が「専制」へ転化してしまう要因として挙げられていることに注意したい。

翌閏五月に入って南部の大都市ニューオーリンズ(ルイジアナ州)に到着する。梁もいやおうなく東部と南部の雰囲気の違いに気づかされる。南部の諸州はこれまでいわゆる「奴隷州」と称され、黒人がほぼ三分の一を占めるとされる。別のことばでいえば「黒いアメリカ」である。

同じアメリカであっても、南部の諸州は共和政体を称しているが実態はいまに至るも「寡頭政体」であり、「寡頭政体」でしか南部を治められないと梁は見なしている(八五頁)。その理由について梁はここでは説得的に語っているとはいえない。

南部の人口は上等白人(旧地主階級)が一〇分の一、下等白人(ラテン系が多い)が一〇分の四余、黒人が約一〇分の四になる。下等白人はチュートン族以外の白人であり「教育」程度が足りないとされる。そして「黒人の繁殖はアメリカの前途にいかなる影響を及ぼすか?」

と増加を続ける黒人の人口に梁は危惧を募らせる。

しかしある統計学家の調査をもとに、梁は白人の競争力は黒人のかなうところではなく、農、工、商業の生産力を黒人が担えないのはもちろんであるが、生殖力についてもそれにしたがって衰えていくのは確実としている。また黒人の自由権は名義上のものに過ぎず、黒人の「奴性〔奴隷根性〕は永久に改まらない」（八七頁）し、人類は生まれながらにして自由、生まれながらにして平等であるがただ黒人のみが人類に入らないとすら断言する。

もちろんここに梁の人種的な偏見をみいだすことは容易である。ただここで注目すべきは、「人種」と「政治」――梁の理想とする共和政――はリンクしていること、つまり「政治」と「民智」の関係である。

五　華僑問題と「族民」

もともと梁の渡米の目的は華僑の実態と保皇会の組織状況を調査することにあった。「新大陸遊記」には各地を訪れる度に維新会のメンバーが出迎え、梁を歓迎するさまがくりかえし記されている。

たとえば、全米最大の華僑人口（梁啓超の推計で約二万七、八千人）を有するサンフランシスコでの模様（八月五日）。「維新会の成立はもっとも早く、在籍会員は約一万人。余が至った時には、軍楽をもって歓迎され、盛況なることニューヨークをはるかにしのいだ。感謝にたえない」（一〇四頁）という。もちろん梁啓超の提示する華僑人口、維新会のメンバーの数およびその歓迎の様子は割り引いて見る必要がある(注46)。

まず確認しておきたいのは「多民族の坩堝」アメリカの現状を見るなかで梁啓超自身「同化」に対してはっきりと否定的な考えをもっていることである。

「アメリカは自ら同化力の強いことを恃みにして種々の異族を吸集してアメリカに同化させてきた」（三二頁）が、「昔日本人が中国人はもっとも同化しがたいといったように、どこに行っても必ずいわゆる支那村支那町なるものができている」という。さらに「今私がアメリカで見たように、中国人だけに限ったことではない。たとえばニューヨーク市中には、イタリア村イタリア町、ユダヤ村ユダヤ町、ロシア村ロシア町ができている。私ははじめての旅行したにすぎないが、一見してその違いが分かるのは、いわゆる同化力というものは僅かであり、緩やかであるということなのである」という。梁啓超はサンフランシスコの華僑の長所の一つとして、「外人に同化しようとしない。すなわち国粋主義独立自尊の特性であ

り、建国の元気である」（一〇五頁）と評価する。

では、このアメリカにおいて中国人はどのように生きていくのだろうか？　サンフランシスコの華人たちは、洗衣業、漁業、厨工業、農業、採鉱業、製靴・捲煙・織帚の三業、通事業、雑貨業、裁縫業、飲食業などに従事している。

彼らは無数、重層的に存在する華人団体にさまざまな形で属している。団体とは、梁啓超の分類によれば、（甲）会館などの公立の団体、（乙）東華医院などの公共の慈善団体、（丙）昭一公所などの商家団体、（丁）葬祭などを行う慈善団体、（戊）一族にかかわる族制の団体、（己）三合会などに源を発する秘密の団体、（庚）保皇会（中国維新会のことで、己亥の年（一八九九年）に始めて成立。会員約一万人。その組織はヨーロッパ文明国の公党のやりかたに則る）など文明の団体、などがある。

ここで注目すべきは、（甲）の公立の団体である。（一）中華会館、（二）三邑会館（南海番禺順徳）、（三）岡州会館（新会鶴山）、（四）寧陽会館（新寧）、（五）合和会館（新寧の残り、肇慶府の一部）、（六）肇慶会館（肇慶府の大部分）、（七）恩開会館（肇慶府恩平開平）、（八）陽和会館（香山）、（九）人和会館（客籍）、（十）六邑同善堂（その県、不詳）。このうち（二）から（九）までが八大会館になる。

梁によれば、以上の諸団体には強制の命令権力があり、サンフランシスコ市中の華人はみな必ず隷属し、各県の人は必ずその県の会館に隷属し、全員が中華会館に隷属するようになる。入会出会の自由はなく、それゆえ公立と称される、と（一一一頁）。中華会館が八大会館の上に立って、全体を統括する。梁にとって会館とは一種の行政組織なのである。

ここで梁啓超は不思議な指摘をする（一一一頁）。八大会館と中華会館の関係はアメリカ各州と連邦政府の関係に似ている。アメリカは各州がまずあってその後連邦ができた。各会館があって中華会館ができた。中華会館の地位は、アメリカ独立後から立憲前の一〇年間（一七七六年から一七八七年）に似ているという。

これらの行政組織とは別に、「文明の団体」として（一）保皇会、（二）学生会、（三）青年尚武会、「準文明の団体」として（四）各教会、（五）同源総局があるという。ではこの「文明の団体」は中華会館や会館とはどのような違いがあるのだろうか。

梁によれば保皇会の組織は、すべて泰西文明国の公党の式に依っており、有機体の発達をしている(注47)。新大陸の主要港湾に十一の総部、その下に八十六の支会をお

く。学生会は留米学生で組織（約七十名）、青年尚武会は保皇会の子弟で日本体育会式の兵式体操を施す（約四十名）。教会はキリスト教信者（約千名）。同源総局はアメリカ籍の華人がもともとはサンフランシスコの選挙投票の権利をもとめて組織されたため「文明」と称することができるという。しかしこれでは何をもって「野蛮」とし何をもって「文明」であるのか判然としない。ここで梁は中国人論を展開する。というのは、このような組織を立ち上げ、運営していくうえで「中国人の欠点」（一二一頁）は梁にとって決定的な意味をもっているからである。

中国人の欠点として、梁は、一、族民の資格があっても市民の資格がない。それゆえ中国では「族制の自治」しか発達させることができないという。二、村落思想があっても国家思想がない、三、専制をうけることができるだけで自由を享受することはできない、四、高尚の目的なしという。

これらは「新民説」ですでにくりかえし説かれているテーマであり、一見目新しい主張ではないようにも見える。「国家思想」については「新民説」第六節「論国家思想」、「自由」については同第九節「論自由」ですでに語られている。しかし、私としては「新大陸遊記」の中国人論に渡米以前の「新民説」には見られない新しい論理を見出したい。逆にいえば渡米後の「新民説」につながっていくいくつかの論理が「新大陸遊記」に見出せるのである。

具体的には、一の「族民」資格があっても「市民」の資格がないとの指摘は実は梁自身が「アメリカに来てからこのことに対してますます確信を得た」（一二二頁）と言っていることに注目したい。

また二の「村落思想」は梁啓超にとっては中国の後進性を象徴する、中国に特有のもののように思われるが、渡米後彼は「村落思想」はアメリカにも存在すると気づく。というより、梁はワシントンで面会したローズベルトの演説「今日のアメリカ国民にもっとも急がれるのは村落思想を脱却することである」と引用する。アメリカにとっても「村落思想」の脱却は大きな課題なのである。そもそもアメリカの民主政はまさにプリマスでみたようなタウンミーティングから始まり、各州各市の愛州、愛市心、つまり「村落思想」から発達してきたことは梁自身も認める。ではアメリカと中国の違いはどこにあるのだろうか。

梁は「アメリカの政治は実に世界においても不可思議な政治である」と述べる（一三三頁）。四十四個の共和国

が集まって、一つの共和国をなしている。これがアメリカ政治の特色であり、共和政体が実行できた原因であるという。

アメリカが自由を獲得できたのは、イギリスからの独立によってであるという者がいるが梁はこれをきっぱりと否定する。アメリカ人はもともと自由であったのであって、自由は突然発生したものではない。フランス革命は自由を求めたものであったが、ほどなくして暴民専制になり、帝政専制になった。南米諸国も自由を求めて革命を起こしたが、結局、蛮酋専制に終始している。ここからアメリカが自由を獲得できたのは革命以外の要因があったのだと梁は結論づける。ここから「革命」の拒絶とアメリカの民主政の対する高い評価が確認できる。

「新大陸遊記」のなかで政党制の弊害（一三八頁）、干渉主義、帝国主義（一四〇頁）、政治家の貪欲（一四二頁）等様々な弊害にしばしば言及している。しかしいずれもその運用、細部に関する批判に限られていて、アメリカの共和政そのものに対する評価は高いといえよう。

では同じく「村落思想」を共有している（と梁啓超は考えた）アメリカと中国でなぜ民主政の運用に違いがでてしまうのであろうか。この点について梁は説得的に語っているとはいえないが、彼の南米政治への言及は参考になるであろう。梁がいうには、南米諸国は独立後、こぞってアメリカ流の民主政を導入したもののどこもうまくいっていない。また南部諸省では民主政を称しているが実態は「寡頭政体」に堕しているのを見た(注48)。

その原因は民智と政治はきっても切れないと考えていた点にある。民主政を導入しようにも民智が低ければ、民主政の運営もままならないと梁は考えたのである。上で言及した族民／市民の喩え（「新民説」第十九節「政治能力」でも「新大陸遊記」と出典を明記して言及されている(注49)）はこのあたりの梁の考えを見事にいいあらわしている。この「政治能力」はアメリカから帰国後いわば「転向後」に発表されたもので、「新大陸遊記」から「新民説」への連続性を考えるうえで注目すべき箇所である。民主政を担いうる「政治能力」をもった「市民」であるかどうかを梁啓超は問いかけるのである。

サンフランシスコの華人社会を見てなおさらその感を強くしたのは、上述三の中国人は「専制をうけることができるだけで自由を享受することはできない」に係わる点である。海外の中華会館の類はきまって、①上等社会の有力者による専断、衆人は唯々諾々の「寡人専制」、②はこれとは逆に上流社会の有力者がいない場合、無頼の徒の専断である「暴民専制」のどちらかであるという

（一二三頁）。それはやはり国民の程度によるのだという。

梁啓超にとって華人社会の現状は中国の将来についてのテストケースであって、中国には自由、民主政は無理との確信をもたらすことになった。ここから「底辺からの新民養成の方策に代えて権力の側からする改造、革新の道を論じる（注50）」という「開明専制」の議論への連続性を見出すのは容易である。

六　結論　「新大陸遊記」の位置づけ

梁啓超は『平民政治』を下敷きにしながらも、アメリカでさまざまなことを見聞し、自らの思想を鍛え上げていった。主たる関心は彼自身もいうようにアメリカの民主政と華人社会をこの目でたしかめることにあったが、この両者は別個のものではなく、互いに関係しあっていた。彼にとってこの旅行は「アメリカ」視察であるとともに「中国」視察でもあったのである。

彼はアメリカの民主政の基礎に人民の「民智」の高さを見出すとともに、華人社会に中国人社会の縮図を見出した。また華僑社会における自治組織、中華会館と議会制度を合わせて論じる独自の視点を提示している。しかし華人による自治組織に対する梁の評価は低く、華人にさらに自由を与えたら「暴民政治」へ転落する恐れから（三四頁）、「教育普及」の必要性をあらためて痛感する（四一頁）。

異文化体験を通じて何が変わったのか何が変わらないのかを学問的に結論づけることは難しい。「多面的なアメリカ」を認識することになったアメリカ体験が「全体」として彼の思想形成にどのような影響を与えたのであろうか。本稿ではその一端が解明できたと考える。

アメリカからの帰国後の梁啓超については、アメリカの民主政・社会への「失望」から「空虚」感が強調され（注51）、そこから「開明専制」論への流れが導きだされることが多い。本稿での分析をみても、そのような見方はやはり一面的であることが分かる。アメリカは想像したような民主政の完備した理想国でなかったことは確かだが、梁は民主政を何とか機能させているアメリカを鏡にしながら中国の現状を見据え、したたかに自らの思想構築を積み重ねていったのである。

注

(1) 以下の引用（本論文中の頁数）は梁啓超「新大陸遊記節録」『飲冰室専集』（二十二）、『飲冰室合集』（七）中華書局収録、による。なお「新大陸遊記節録」には英文の抄訳（ただしニューヨーク滞在時のごくごく一部に過ぎない）が存在する。Liang Qichao"Selections from Diary of Travels through the New World "*Sino-American Relations*,Spring,2002.pp.82-100.

(2) 丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社、一九八三年、三一一頁。島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』（全五巻）岩波書店、二〇〇四年、は大いに参考にした。ただし訳文は自分で工夫した。

(3) 飲冰「海外殖民調査報告書」（一）、『新民叢報』第二十八号。

(4) 梁啓超「復金山中華会館書」『飲冰室文集』（五）六六～六七頁。

(5) 梁啓超「夏威夷［ハワイ］遊記」『飲冰室専集』（二十二）一九二頁。

(6) 湯志鈞編『康有為政論集』（上）中華書局。一九八一年。

(7) 野村浩一「民族革命思想の形成――革命派と改良派の思想」『近代中国の政治と思想』筑摩書房、所収。野村氏はルソー的主義的な共和主義と決別し、ブルチュリの「国家」学への転換があった、とする。

(8) 狭間直樹「新民説略論」、同編『梁啓超――西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、一九九九年。「新民説」の論理構造を丹念におった貴重な研究成果である。

(9) 坂出祥伸「梁啓超の政治思想」、『近代中国の思想と科学』（増補改訂版）、朋友書店、二〇〇一年、二七七頁。

(10) 梁啓超「致徐勤書」、李華興編『梁啓超選集』上海人民出版社、三九二頁。

(11) 梁啓超「釈革」『梁啓超選集』三六八～三七二頁、に「革」（革命）についての梁の見解が示されている。

(12) 梁啓超「致蔣智由書」『梁啓超選集』三九三頁。

(13) 梁啓超「致康有為書」『梁啓超選集』四一四頁。

(14) 張朋園『梁啓超與清季革命』中央研究院近代史研究所、一九六四年、一七七頁。耿雲志『梁啓超』広東人民出版社、一九九一年、一四二頁、等。

(15) 『梁啓超年譜長編』三一九～三三三頁。

(16) 張朋園『梁啓超與清季革命』第六章。

(17) 張朋園「社会達爾文主義与現代化――厳復、梁啓超的進化観」、『知識分子与近代中国的現代化』百花洲文芸出版社、

二〇〇二年所収、一〇三頁。

(18) 桑兵「保皇会的宗旨岐変与組織離合」『近代史研究』二〇〇二年、第三号、はこの間の梁啓超思想の変化を保皇会の側からおった労作である。

(19) ボストンでは『東学西漸記』で有名な容閎（容純甫）（一八一七～一九一二）（当時七十六歳）にも会っている。「かくしゃくとして以前と変わらず」、中国に対する憂国の情に溢れているとの印象を記している（四六頁）。

(20) 随所に引用される統計資料（アメリカへの移民統計、二八～三一頁。フィラデルフィアでの海軍統計、七三～七七頁、等）、他の書籍から引用（前掲『美国政治論』）等。

(21) 「新大陸遊記節録・凡例」。

(22) 梁啓超自ら「本文の一段中に書かれていることは、あるものについては一時に書かれたわけではないものもある」（「凡例」）と述べる。つまり時系列的に忠実な日記というわけではないということである。

(23) 私が念頭においているのは、例えば、梁啓超より二年ほど後の、戴鴻慈『出使九国日記』（一九〇六年、農工商部より刊行）等。戴鴻慈は皇帝の命を受け政治制度視察のため一九〇五年から一九〇六年にかけてアメリカをはじめとする欧米各国を歴訪、その記録『出使九国日記』を残した。

(24) 梁啓超不在中、『新民叢報』の経営を任された馬君武は、送別辞を送っている。馬君武「壬寅春送梁任公之美洲」（一九〇二年春）、『馬君武集』華中師範大学出版社、一九九一年、三九九頁。

(25) 『飲冰室文集』（二）、七頁。

(26) 佐藤慎一「フランス革命と「中国」」、『近代中国の知識人と文明』東大出版会、一九九六年。

(27) 「二十世紀太平洋歌」光緒二十七年作とされる。『新民叢報』第一号、『飲冰室専集』（四十五）。

(28) 四月のニューヨーク滞在中の「私が聞くところでは、日本の遊歴家がみな言うには、まずアメリカに行ってヨーロッパに行った者はヨーロッパの局促［せせこましい］頑旧に驚かないものはいない。ヨーロッパに先に行ってその後アメリカに行った者はアメリカの囂塵［騒々しいこと］雑乱に驚かないものはいない、と。私はまだヨーロッパに行ったことがないので私は言うことはできないが。」（三六頁）

(29) 『飲冰室専集』（二）、五頁。

(30) もちろんアメリカ史がピルグリムファーザーズのプリマス上陸からはじまるニューイングランド地方を中心としたWASP の単線的、一元的発展過程で描けるわけではないことは今日の常識であろうと思われる。

(31) 人見一太郎（ひとみ，いちたろう）（一八六五～一九二四）は、明治前半の評論家、実業家。筆名に呑牛、的面生、鬼的面。熊本県生まれ。明治十七年、徳富猪一郎（蘇峰）の大江義塾に入る。二〇年創設の民友社に加わり『国民之友』の持主・印刷人・編集人となる。二三年『国民新聞』の創刊にかかわり、論説委員をつとめる。その後、実業界に転じた。（臼井勝美他編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、二〇〇一年。）

(32) 人見は『平民政治』「著者ブライス氏の伝」で「此の書一たび世に出でて未だ二年ならず版を更ふる幾回売り尽すもの十数万部……彼の米人すら、『英人の中には未だブライス氏程我邦の政度に通暁したる者あらず』と賛嘆し、トークヴヰールの『デモクラシー、イン、アメリカ』も殆ど新著の気焔に圧し去らんとするの勢なり」という。

(33) 夏暁紅『覚世与伝世――梁啓超的文学道路』上海人民出版社、一九九一年、第九章等。

(34) ブライスは、本書執筆の目的を、アメリカの人種、歴史、慣習、観念等を「演繹的方法の弊に陥んことを避け、単に事実のみを取来りて力の及ふ限り之を其関係の一目瞭然たる様に排列」することであるという。『平民政治』第一章総論、九頁。

(35) 『平民政治』一五九～一六〇頁。

(36) 『平民政治』一四九五頁以下、等。

(37) 「美国大統領選挙臆評」（無署名だが李国俊は梁啓超によるものと見なす）（『新民叢報』第四九号。一九〇四年）では内治外交では問題がないにもかかわらずトラストへの監督を強化し資本家の意向を無視したことのよってローズベルトが苦戦を強いられるであろうと予想する。

(38) 『平民政治』一五七一頁以下、等。

(39) 升味準之輔『比較政治Ⅱ　アメリカとロシア』東大出版会、一九九三年、六二～六七頁。

(40) シグムンド・スカード「西欧におけるアメリカ像」『世界におけるアメリカ像――研究と展望』南雲堂、一九七二年、一四三頁。

(41) 『飲冰室文集』（一）、七七頁。

(42) 梁啓超にしても特権階級化した満州族の実情に対しては実はかなり批判的だった。「民族の精神を喚起するにはいきおい満州を攻撃せざるをえません。日本にとって「討幕」はもっともふさわしい主義であり、中国にとっては「討満」がもっともふさわしい主義です。弟子のみるところこれは変えようがありません。満州人の朝廷は人望を失って久しいです。」『梁啓超年譜長編』一九〇二年の項、二八六頁。

(43) Edward J.Rhoads,*Manchus &Han:Ethnic Relations and*

Political Power in Late Qing and Early Republican China,1861-1928,二〇〇〇年、五頁。同書は梁啓超の問題意識を導きに清末から民国初にかけての満漢問題を俯瞰したもの。

(44)『飲冰室専集』(四)、七頁。

(45) 梁啓超の「人種」に関する精彩ある分析は、石川禎浩「近代東アジア"文明圏"の成立とその共通言語」狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』京都大学学術出版会、二〇〇一年。

(46) 梁は全米の諸都市の華僑人口について、例えば、ニューヨーク(八〇〇〇)、ハーバード(一〇〇)、ボストン(四〇〇〇)、フィラデルフィア(一〇〇〇)、ワシントン(五〇〇)、ニューオーリンズ(一〇〇〇)、シカゴ(三〇〇〇余)、ポートランド(一〇〇〇)、シアトル(三〇〇〇)、サンフランシスコ(三〇〇〇〇)、ロサンゼルス(五〇〇〇)、アメリカ全体で十二万人と推計している。(一〇五～一〇六頁)

(47) 保皇会の成立にいたる貴重な資料は『康有為与保皇会』上海人民出版社、一九八二年。

(48) 梁啓超「新民説・政治能力」でも同じ論旨を展開している。『飲冰室専集』(四)、一四九頁。

(49) 梁啓超「新民説・政治能力」『飲冰室専集』(四)、一五三頁。

(50) 狭間直樹「「新民説」略論」九六頁。

(51) 耿雲志他『梁啓超』、等。